

「先生だけには話すけどさ」 生徒がそう思える関係を築く。

「ハッサー」と生徒から親しまれている長谷川雄亮先生。普段から生徒一人ひとりの背景を見ながら、本人が納得のいく進路指導を心がけている。

民間企業の内定を断り、教師の道を選んだ。決め手は大学4年の教育実習。「就活で訪問した企業とは明らかに違う時間の流れ方、雰囲気があって、自分に合っている気がしました。何より子どもたちの反応がおもしろくてうれしい気持ちに。それで試験を受け、今の高校に就職しました」

進路指導部員でもある長谷川先生は、商学部で学んだビジネス知識と、学生時代の友人とのつながりを駆使し、生徒に現実の実態、厳しさを伝えるようにしている。

「例えば、ビジネス情報誌の『年収と学歴』特集をコピーして配り、シビアナ社会の状況を伝えたり。実際、世の中のしくみがどうなっているのかを知らないまま、狭い視野の中で安易に進路を選ぶのは良くないと思うので。また、私には生徒自身が本当に入りたい学校へ行かせてやりたいという思いが強いです。そのため、一人ひとりの背景を見ながら、彼女たちが納得のいく選択ができるよう指導しています」

心を開いてもらえないと、本音の指導は難しい。そこで、時には親友のように思ってもらえるよう接するという。

「実は進路のことで親ともめているなど、人には隠しがちなことでも『先生だから話すんだけどさ』という関係性を、一人でも多くの生徒と築きたい。だから、気になる生徒には『ぶっちゃけどうなの?』と、本音を聞き出せるように声をかけます」

よろこびも悲しみもくれる 生徒が愛しい

信頼関係ができれば、授業もスムーズ。多少ハードルを高くしてもついてきてくれる。反対に信頼がないとどんなにいいに進めても伝わらない。生徒と教師は双方向、対等なかかわりが大切だというのが実感だ。

教師7年め。生徒たちとの日々が今、最高に楽しくてたまらないと言う長谷川先生。「もちろん腹の立つこともあるし、生徒指導がうまいかなくて苦しんだこともある。でも、一方で彼女たちの成長を感じた瞬間のよろこびに勝るものはありません。まさに教師にとつての醍醐味すべてを与えてくれるのが生徒なんです」。休日にも生徒たちのことを考えてしまう。でも、それがうれしい。

イケてる
センセー!!
vol.11



愛知・私立聖雲高校
長谷川雄亮先生 (29歳)

1984年愛知県生まれ。愛知・私立南山高校男子部卒。慶應義塾大学商学部へ入学。文学部人文科学コースも履修し、卒業と同時に修了。就職活動を行うが、教育実習で教員という仕事のおもしろさを改めて知り、07年より現職。担当教科は古典。生徒会、生徒指導部を経て10年より進路指導部へ。



教科は古典。「教科書でいくつもの作品のパーツを学ぶより、一貫性をもって一つの作品をじっくり学ぶほうが心に残るし、古典のおもしろさも伝わる」と考

え、源氏物語なら源氏、一つの物語を集中して学べる教材を独自に作成。「プリントは古典で大事な文法、古語、当時の文化をわかりやすく学べるよう配慮し、余白も設けて復習もしやすく工夫しています。また、女子高なので、時折かわいらしいマンガも取り入れ、やわらかなテキストに仕上げています」

fan message



自分の意見をはっきり言い、リーダーシップを発揮してくれています。生徒からの働きかけもうまく受けとめ、実現できるよう対処しているし、たとえ生徒が失敗しても次に生かせる指導をする。何でも安心して任せられる、頼りになる存在です。(進路指導部長 河村暢哉先生)